BULLETIN OF JAPAN BOOK IMPORTERS ASSOCIATION

洋書輸入協会会報

VOL. 8
NO. 3

（通巻83号） 昭和49年3月

理事会報告

1月28日（月）

(一) 海賊版についての報告—総務委員会

レプと協同して対策を構じている旨の報告があった。

(二) ブリティッシュ・カウンシルーのモーン氏からの要請について——渡辺氏報告。

11月に英国出版社代表団が来日するので、その研究題目についに意見を述べてほしいという要請があったとの報告があり、こんごの理事会で検討することとなった（この件については、Booksellers 2月2日号を参照のこと）。

(三) 2月14日2時から出版クラブで労働研究委員会のセミナーが開催されるので、協力の依頼が同委員会からあった。

(四) 諸情勢の検討。

(五) その他。

2月12日（火）

(一) 12月分及び1月分の収支計算・予算対比表の検討、承認。

(二) 賛助会員の入会承認。

Japan English Service. 代表者 Mr. Roger D. Ahlberg.

(三) 雑誌・資料委員会から現在の活動について報告あり。

(四) その他。

2月26日（火）

(一) 各委員会からの49年度予算要求の概要について、総務委員会から報告があり、同委員会で49年度予算の原案を作製することとなった。

理事会報告……1
会報委員会だより……2
フランクフルト国際書籍展……3
会員紹介 OECD……4
Book Review……5
海外ニュース……6
ニュース……6
通関統計……6
社名変更のお知らせ……6
新入会員のお知らせ……6
総代理店御案内……7
会員の横顔(南江堂)……7
広告 （OECD）……8

(二) 労働研究委員会から次回のセミナーの計画について報告があった。

(三) 通関委員会から、2月20日の東京外郵通関協議会幹事会において、関税定率法21条関係消去の問題について新たに指示があった旨の報告があり、協会としてもこの指示に従うことを確認した。

(四) 香港ドルの実勢が強くなっていることに伴い、ポンドとの換算で取引上不利を生じている向きもあるので、この問題の解決についての接渉経過が報告され、承認された。

会報委員会だより

大島で編集会議

会報委が毎年秋に行っている都心を離れての編集会議兼旅行が、昨秋は委員のうちの何人かが海外に出張中で果せず、新春、といってももう屠蘇気分も消えた1月20日に、折から椿まつりに賑わう伊豆大島に出かけることになった。

石油不足で、予定していた船便が欠航となり、止むを得ず熱海に集合「はまゆう丸」船上の人となる。好天に恵まれ、デッキの上で太平洋のトバ口のオゾンを吸いこんだのも束の間、一時間後には大島元町着、桟橋に出てみて驚いたのは日曜の午後とあってこれから東京に帰る人のおびただしい行列。「これはまるでダンケルクだ。」というような言葉がすぐ飛び出すのだから委員諸氏のおよその年令の程も知れようというものである。

宿の小湧園に着くと、服を着替えるひまもなく、直ちに編集会議が始まる。初場所千秋楽の日のこととて、好取組の幾つかもあるのだが、会議が済むまでテレビはつけないこと、とマジメ委員会らしい申し合せも成立。今月は原稿の集まりが比較的良く、2月号の誌面はまずまず埋められそうである。しかし一方では紙・印刷代の高騰から、従来のような頁立て（10～12頁）をしていては予算がとても足りない、という問題が出てくる。当分の間「8頁立て」を原則とし、紙面を縦二段に割るなどして内容は従来のものをあまり下廻らないようにすること。スペースの関係で寄せられた原稿に多少のカットなどすることも止むを得ないだろう、というような相談がまとまる。そんな事情で、〆切りをせっついて書いていただいた丸善・大野さんの「フランクフルト見学記」も3月号廻しとなる。こういう時、忙しい思いをして書いて下さった寄稿者には申訳ないと思うが、その反面、会報委としては「貯金」が一つあるということで大変心強いものなのである。紙面が少ないのでは……などということは気になさらずに、これからも会員の皆様の寄稿・投書を続々お願いしたい。山のように積まれた原稿を前にして、「これは来月廻し、これは没！」などと一度でよいから云ってみたい、というのが我々スタッフの夢なのです。

現在連載中のものは「特別記事（寄稿）」「外国出版社紹介」「ブックレビュー」「海外ニュース」「会員の横顔」等があり、それにやや不定期の形で「経営シリーズ」「実務シリーズ」等が加わる。その殆どすべてを10人の委員が廻り持ちで原稿を集めたり書いたりしているわけだが、会報発足以来はや六年、相当の経験を積んだとはいえ、時にはしんどくなる仕事である。

編集会議の疲れを温泉で流して夜は麻雀。そして翌日は寒風吹きすさぶ三原山に駆足登山をやって、大正・昭和一ケタ組の心意気を示した一行が、レンタカーを駆って島めぐりを終えて暮れなずむ東京の街に帰って来た時、ネオンの消えた夜空からは雪が降り始めていた。（KS）

「フランクフルト国際書籍展」

大　野　　俊

昨秋のフランクフルト書籍展を見学してから既に4ケ月たち、今更ここでしかつめらしい感想を述べる気はありませんが、協会の視察団に初めて参加したものとして気付いた事柄の二、三を思いつくままに書いてみたいとおもいます。

今回も世界の50カ国以上から約3,800の出版社が参加し、部門別に3つのホールにそれぞれおさまりました。互に肩をぶつけ合い両手を一ぱいに拡げて本を展示していると云った恰好です。次から次へと親しみのある社名が出てきますが、それでも初めてお目にかかるところも少なくありません。ここで出版の情報や企画が交換されたり、オリジナル書の買付と同様に出版にまつわる副次権、既ち飜訳権、リフリント権そして映画権などが活溌に売買されることは先刻ご承知の通りです。歴史と伝統を誇る国際的なブック・フェアーであるだけに、さすが質・量ともに素晴しいものです。総数約25万冊と云われるこの圧倒的なボリュムーの中にどっぷりとつかって出版界の動きと云ったものを私なりにこの肌でじかに探り得たのは幸いでした。

それにしても3,800に及ぶ出版社を全部たんねんに見ることはとても不可能です。取扱っている本のカテゴリー別にするか、取引関係を主体にするか、いずれにせよ訪ねるものの立場によって予め的をしぼってアプローチする必要があります。私の場合は日本をたつ前にアポイントメントをとりつけた所と主要な取引先を重点的に出来得る限り多くあたることにしました。それでも話の内容によっては一社だけで半日もつぶれてしまい、予定どうり事が運ばず、全くもどかしいおもいをしました。しまいには名刺の交換もそこそこにスタンドからスタンドをかけめぐるようなことになりました。どこでもよく歓迎してくれましたが、なかには手ぐすねを引いて待っていて無理難題をふっかけてきた所もあります。一人で数人を相手に日本の市場を説明しながら懸命にやりあったことが今となっては懐かしく想い出されます。

このようにせかせかした慌しさがブック・フェアーについての拭いきれない印象でもありますが、これはフランクフルト入りの日時にも関係がありました。10月11日より16日までの6日間が開催期間でしたが、視察団の一行は第3日目の夕方にフランクフルトへ着き、翌日より行動を開始しております。一行とロンドンで別れて単独行動をとった私も第2日目の夕方会場に着きましたが、共にやや遅きに失した感がなくもありません。会場を見る時間もさることながら次のようなこともあります。社長や担当責任者のおおかたは前半の3日間だけつめていて、後半は若手に託して帰国してしまうために、時にはその場で決まる商談も決まらず、得られる情報も得ら

れないことにもなりかねません。その上これ等おえら方とこみ入った話がある場合には予めアポイントメントをとりつけておかねばならず、それが何社にも及べばその時間の調整が大へんで、その事だけでも半日仕事になるからです。これも第1日目にやった方が有利であとから割り込むのは難しいことになります。オープニングのパーティを催す出版社もありますが、これもおおむね第1日目に行われます。

どのスタンドも商売熱心でパンフレットやカタログなどをふんだんに提供してくれます。知った相手であれば本社へ郵送することを頼めますが、初めての所はそうはいきません。ケチな根性が働いて出されたものを断り難くそして捨て難く、何時のまにやら相当な量になってしまいました。とてもすべてを持ち帰えれず、その処理に往生しました。ホールには特別の郵便局があって海外への郵送や通信をたすけているのですから、前以って封筒や包装紙などを用意しておくと良いと思いました。

最終日には訪れる人も少なくなり、係員が帰国してしまったのか誰もつめていないスタンドがやたらと目につき、昨日までの賑わいが嘘のようでした。会場全体が何となく帰り支度のムードで、こちらも気がのりません。展示された書籍はドイツの本屋さんに格安の値段で引取られるとのことでした。そんな時、会場でばったりと紀伊國屋の相良さんにお会いしました。二人でクラウスのスタンドを訪ね、協会でも問題となっていた仕切り価格について討議したのを最後に、会場をあとにして一諸にマインツに向いました。フランクフルトから列車で40分位の所で、かの有名なグーテンベルグ博物館のある古い町です。出版界の今日の繁栄をもたらした世界最初の印刷機と42行のバイブルをまのあたりに見たことは忘れられない感激で本屋冥利につきるものでした。

エネルギー危機による製本材料や印刷電力の不足はこの業界にとっても誠に深刻な問題です。国の内外で価格の値上げや減産の暗いニュースをしばしば耳にするたびに、ブック・フェアーで見たあの素晴しい書籍の洪水は人がある限り何時までも流れ続けて欲しいものだと思います。　（丸善）

会員紹介

（賛助会員）

経済協力開発機構（OECD）出版物センター
OECD Publications Center

東京都港区赤坂2-3-4 赤坂パークビル3F　(03) 586-2016/8

代表者 **John R. Barnett**

ＯＥＣＤは、1961年、その前身であるＯＥＥＣ（欧州経済協力機構）を継承した時点をもって公式に発足し、現在では、1973年に、ニュージランドを迎え、加盟国数は24カ国になっている。

ＯＥＣＤの基本的役割の一つとして、加盟諸国の未来計画作成に対する援助があげられるが、その為ＯＥＣＤは、各委員会による経済諸問題の研究、統計、分析、実態報告の作製配布にも力を入れておりこれらの出版物を日本国内で容易に入手出来るようにとの目的から、ワシントンに次いで二番目に、東京に、当ＯＥＣＤ出版物センターが設立された。1973年7月、ＯＥＣＤの諮問機関であるＢＩＡＣ日本委員会や日本政府の全面的協力の下に、正式に開所され、目下各種サービスを行っている。

東京センターでは出版物の販売が中心であるが、閲覧も出来るようになっている。出版物は約300点の単行本と13種の定期刊行物からなっており、下記部門に類別されている。

1　経済及び財政問題
2　統　計
3　開　発
4　農業一食糧一漁業
5　エネルギー一産業一輸送一観光事業
6　環境一土地利用計画
7　労働力及び社会問題
8　科学及び技術
9　教　育
10　情　報

その他、新聞向け資料、未出版報告、ＯＥＣＤの各種活動を紹介する情報等を備えている。

BOOK REVIEW No. 13

庄司浅水著「印刷文化史：印刷・造本・出版の歴史」と出版文化史について

相　良　廣　明

出版文化史という言葉そのものが、やっと定着し始めて、各大学の「特殊講義」に顔を出すようになってから未だいくらも年数が経っていない。書誌学は図書館と併行して相当な昔から発達して来たが、通史としての、しかも文化的側面から捉えたいわゆる日本の出版文化史は、私の知る限りでは戦前の昭和13年に日本出版文化史刊行会から刊行された「日本出版文化史」が最初のものであり、戦後は岡野他家夫氏が先ず新書版で出されたものを改めて昭和34年に集大成されたものの計二点があるだけである。岡野氏はその本のあとがきで、「明治・大正・昭和篇を（新書を）一本にまとめて出すようにとの好意あるすすめを図書館方面、出版関係者、読書人などから屡々うけるのであったが、資力のある有名出版社で、その刊行を引受けてくれる所は、ついに一社もなかった。『よいものだがどうも売行きが……（儲かりません）』というのがどの社もの御多分にもれぬ挨拶であった。」と書いておられる通りに、此の本は春歩堂という所から漸くにして出版され、日ならずして品切れとなり、以後絶えて再版されたという話を聞かない。私も後者の日本出版文化史を探しに探した揚句、やっと坂田書店に見付けて貰ったが、何とそれが前者の、つまり戦前の出版文化史で、これは最初からあきらめていたものだけに思いがけぬ喜びを味わった次第である。後者の方は、とうとう奇特な友人の学研・細野氏に頼み込んでその蔵書を譲って貰った有様で、「出版文化史」という分野の本がいかに出版が困難か、そして出版されたものの入手が難しいかを身に泌みて味わっているものである。

それだけに、出版ニュースの書評欄で「印刷文化史」を見掛けたときには、その書評が必ずしも賞めたものではなかったにもかかわらず、よくも此のような分野の本を出版してくれたという驚きの念の方が強かった。

庄司氏の補遺とあとがきによれば、昭和10年前後に同氏の手によって「世界印刷史年表」が上梓され、昭和13、4年頃から本書の資料収集・調査・研究、そして執筆にとりかかり、20年に近い歳月をかけ昭和32年に初版が刊行された。更にそれから16年の間を置いて、昭和48年に増補第2刷の本書が出版されたものである。

書物研究家としての同氏が自ら「わたくしの金字塔」といっておられるように、洋の東西にわたり、古今に通じた労作である。目次が既に極めて懇切丁寧であり、111枚の図版が附されている。300頁足らずで定価1600円、同氏の「本、本の世界」（昭和45年毎日新聞社発行、650円）のように、色刷り・グラビヤ版をもっと沢山入れて欲しかったが、値段の関係でそうもいかなかったのであろう。

末尾に「世界印刷文化史年表」と、詳細を極めた索引が附いている。一口で言えば、この本は、印刷文化史事典とも呼ぶべきもので、そのまま書誌学も兼ねている点、出版産業の一端に居る者に取っては、便利此の上もない。

出版は、需要があって供給がなされる所は一般産業と同じようなものであるが、特に此の世界では需要が伴わないのに供給がなされるという、一種の自己犠牲的な、或いは自己満足的な労働も伴い得るという、経済原則に外れた活動が存在している。先程挙げた「日本出版文化史」といい、この本の初版といい、いずれもこの経済原則に外れた出版活動に近いもので、久しく絶版のままに過ぎてしまった。

今日この頃、我々の周囲でも、このような地味な出版関係の研究書を求める空気が出て来ている。読み易いだけにとっつき安く、それだけにこれを足掛りにして更に先へ進もうという興味も湧こう、その可能性があるだけに、出典が明記されていないのは惜しいし、また文化史としての哲学に欠ける所も物足りないが、ともかくグーテンベルグの項等は出色のもので、本当に面白く読ませて頂いた。よくこれだけ資料を集められたものと、先達の苦心に敬意を表せざるを得ない。印刷学会出版部の発行だけに、造本も見事である。（発行所：印刷学会出版部　1600円）

海外ニュース

「米国出版統計」

1973年度の米国の出版統計がPublishers Weekly, 2月4日号に発表されている。要点を紹介すれば次の通りである。

出版点数

1973年の総出版点数は39,951点で、前年より5%増加した。内訳は、新刊が28,140点で4.7%増加、重版およびリプリントは、前年の11,185点に対し、1973年は11,811点であった。

分野別に見れば、児童書の約24%の減少、文芸学の9%減少などが目立つが、後者は記録のとり方が変ったためと見られている。増加が著しい分野は、伝記17%増、フィクション13%増、教育25%増、哲学および心理学20%増、科学5%増などである。

ペーパーバックの出版点数は、記録されたかぎりでは、若干落込んだようである。

英語への翻訳書は30%増加。輸入書は、17%減少している。

書籍の平均単価

ハードカバーの書籍約29,000点の平均単価は$12.20で、1972年の$12.99よりも6.4%下っている。しかし、フィクションの平均単価は$6.47から$7.73に高騰、科学は$16.05から$17.34に上っているなど、その傾向は分野によってまちまちである。ハードカバーの書籍の平均単価が前年より下ったのは、ファクシミリ・リプリントなどのような非常に高価な出版物が前年より少なかったためであろうと推測されている。

大衆市場向のペーパーバックは、$1.12から$1.17に上っている。しかし、それ以外の一般のペーパーバック約7,000点の平均単価は、$4.24から$3.73へとかなりの値下りを示している。

売上げ高

1973年のトータルはまだ出ていないが1972、年の$31,770億より著実に伸びている模様である。11カ月間で比較すれば、輸出は13.5%増、輸入は3.8%減となっている。

——紀伊國屋書店提供——

ニュース

☆ フランス Editions Gallimard の Mr. Augustin Gilloire 及び Kaiman & Polon, Inc. の Mr. A. L. Polon 1月下旬来日。

☆ スイス Office du Livre の Mr. Jean Hirschen 2月上旬来日。

☆ 米国 Kraus 社の Mr. J. Alper 及びリヒテンシュタインの Kraus Reprint 社の Director, Miss U. von den Steinen 2月中旬来日。

☆ 米国 McGraw-Hill International Book Co. の General Manager, Export Dept., Mr. G. Stanley Kendrick 2月下旬来日。

☆ 英国 Longman Group Ltd. の Group Sales Director, Mr. Michael Wymer 及び Mr. D. J. Mortimer 2月下旬来日。

☆ 英国 Weidenfeld & Nicolson Ltd. の Export Sales Director, Mr. Evan R. M. Henderson 2月下旬来日。

通関統計

外国貿易概況（大蔵省関税局編、日本関税協会発行）1973年11月号所載。

書籍、新聞、雑誌の輸入額。

昭和48年11月	$5,815,000	1月以降累計	$60,739,000
昭和47年11月	$5,313,000	〃	$56,570,000

（註）此の統計は、ＣＩＦ価格で10万円以下の少額貨物は含まれない。

社名変更のお知らせ

次の通り社名変更の通知がございましたのでお手許の会員名簿の訂正をお願い致します。

（旧）ブリティッシュ・ブックス株式会社
（新）ロングマン・ペンギン在日事務所

新入会員のお知らせ

今回下記のかたが会員として入会されましたので、お手許の会員名簿にご記入願います。

賛助会員

（有）ジャパン イングリッシュ サービス
代表者 アルバーグ, D. ロジヤ
〒171 東京都豊島区目白2-27-8
☎ (03) 982-0813

Representative of William Collins, Croom Helm, Souvenir Press, Martin Robertson, St. James Press and Stanley Thornes. Also Publisher of Inforasia.

総代理店ご案内

次の通り日本総代理店の案内がございました。お手許の Agent List にご記入願います。

㈱ 医学書院　　☎ 814 - 5931

Year Book Medical Publishers

YFAR BOOK SERIES 1974

*Anesthesia (Ready Fall, 1974)
*Cancer (Ready Fall, 1974)
Dermatology (Ready Summer, 1974)
Drug Therapy (Readey Spring, 1974)
Ear, Nose & Throat (Ready Spring, 1974)
Endocrinology (Ready Summer, 1974)
Medicine (Ready Summer, 1974)
Nuclear Medicine (Ready Spring, 1974)
Obstetrics & Gynecology (Ready Fall, 1974)
Ophthalmology (Ready Summer, 1974)
Pathology & Clinical Pathology (Ready Summer, 1974)
Plastic & Reconstructive Surgery (Ready Early 1974)
Psychiatry & Applied Mental Health (Ready Early 1974)
Radiology (Ready Spring, 1974)
Surgery (Ready Fall, 1974)
*Urology (Ready Fall, 1974)

(*印３点は1973年版も総代理店に指定されております。)

㈱ 丸　　善　　☎ 272 - 7211

Grant, M. and J. Hazel. - Gods and Mortals in Classical Mythology. (G. & C. Merriam)　¥5,550

Heinlein, W. E. and W. H. Holmes. - Active Filters for Integrated Circuits: Fundaments and design methods. '73. 656 p.
(Springer Verlag, New York)　ca ¥16,680

CRC Handbook of Marine Science. 3 vols. Ed. by F. G. W. Smith and F. A. Kalber
(CRC Press) per vol.　ca ¥13,320

CRC Handbook of Spectroscopy. 2 vols. Ed. by J. W. Robinson
(CRC Press)　Vol. 1:　ca ¥13,320
Vol. 2:　ca ¥12,390

ユナイテッド・パブリッシャーズ・サービス社
☎ 262 - 5278

総代理店業務開始のお知らせ

英国　The EP Group of Companies, Yorkshire
European Bibliographical Center - Clio Press, Oxford (Book line only)
Kogan Page Ltd., London

米国　Ballinger Publishing Company, Massachusetts
Marquis Who's Who Inc., Illinois
(Except: Who's Who in the World)
Oriole Editions, New York

代理店業務停止のお知らせ

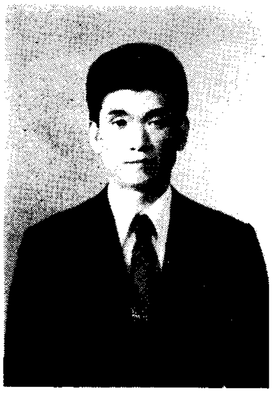
英国　Gordon & Breach Science Publishers
Gregg International Publishers

米国　Appleton—Century—Crofts

会員の横顔

南江堂

加藤　勉



カラカラと音を立てて自転車の輪が廻る。輪まわしの棒を片手に息を切らせてその後を追う少年は一寸得意気である。ここに来て数ケ月、この技では誰にも負けなくなった。無為に過す時間を知らない少年には、一つのことで人にぬきんでた、という充足感が何ものにも代え難い。やがて陽が沈む。爆撃で半ば崩れた建造物の蔭に、真赤な大陸の陽が沈む。父母のもとに帰る時である。その時少年の胸に憂愁の影が拡がる。何時ここを出て日本に帰ることが出来るだろうか、とそのことに明け暮れする父母の顔を見るのが少年には重苦しい。ここは奉天（現、瀋陽）の貨物廠終戦の年の冬である。

それから20年。単身赴いた旅先のドイツで、彼は青年の日に憧れたケートヒェン（ドイツ文学史上有名なクライストの戯曲「ハイルブロンの少女」の主人公）にゆかりのハイルブロンの城のあたりに沈む陽をみた。20年の歳月の流れを顧りみて彼の心が一瞬感傷で満たされたとしても、それを誰が笑うことが出来ようか。

昭和７年奉天で生れ、中一の年に終戦引揚、苦しい道を歩んで教育大の独文に学び、南江堂に入社してからは資料作り一筋に打ちこむこと数年、従来の受注・販売方式を大量仕入による在庫・販売に切り替えるべくヨーロッパに乗りこんで結んだ総代理権契約がヒットして、南江堂洋書部の地歩を一層堅固なものにし、今は洋書部長を勤める加藤さんの、物静かな話し方はお年の割りに老成した感じを人に与えるけれど、時々口許に浮ぶ微笑に、親の苦労も知らずに輪廻しに興じていた少年の日の面影がしのばれる。卒論で取組んだゲーテの「親和力」が今でも自分を虜にする、と語る文学好きでもある。此の道に入って15年の間で一番ショックだったのは、五年間カード作りばかりやっていて「君、課長をやれ」と云われた時の事だという。「一体どうなることかと思いましたよ」と、いまだにショック覚めやらずという表情で語られる。

趣味は、自称万年Ｃ級のゴルフと囲碁。お家には二人の男のお子さんがいられる。（自宅：千葉県印旛郡四街道町鹿渡794）

OCDE

OECD

ORGANIZATION FOR ECONOMIC COOPERATION AND DEVELOPMENT

Headquarters: 2, rue André-Pascal, Paris XVI, France

28th April 1974 is 10th anniversary of Japan's membership in OECD.

Our publications are grouped into the following:

1. ECONOMIC & FINANCIAL AFFAIRS
2. STATISTICS
3. DEVELOPMENT
4. AGRICULTURE - FOOD - FISHERIES
5. ENERGY - INDUSTRY - TRANSPORT - TOURISM
6. ENVIRONMENT - LAND USE PLANNING
7. MANPOWER & SOCIAL AFFAIRS
8. SCIENCE & TECHNOLOGY
9. EDUCATION
10. INFORMATION

MEMBER COUNTRIES

Australia	Greece	Norway
Austria	Iceland	Portugal
Belgium	Ireland	Spain
Canada	Italy	Sweden
Denmark	Japan	Switzerland
Finland	Luxembourg	Turkey
France	Netherlands	United Kingdom
Germany	New Zealand	United States

SPECIAL STATUS Yugoslavia

OECD Publishes 100 books and periodicals yearly.
Send for free catalogue with complete listing.

OECD PUBLICATIONS CENTER

Akasaka Park Bldg.
2-3-4 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107
Tel.: 586 - 2016 / 8

(At Tameike between Nissho-Iwai and Komatsu Buildings)

昭和49年3月　通巻第83号　洋書輸入協会　編集者　寺久保一重
〒103　東京都中央区日本橋1丁目20番3号　藍沢ビル302号室　☎271—6901
〒530　関西支部　大阪市北区芝田町28　第一山中ビル　☎371—5329